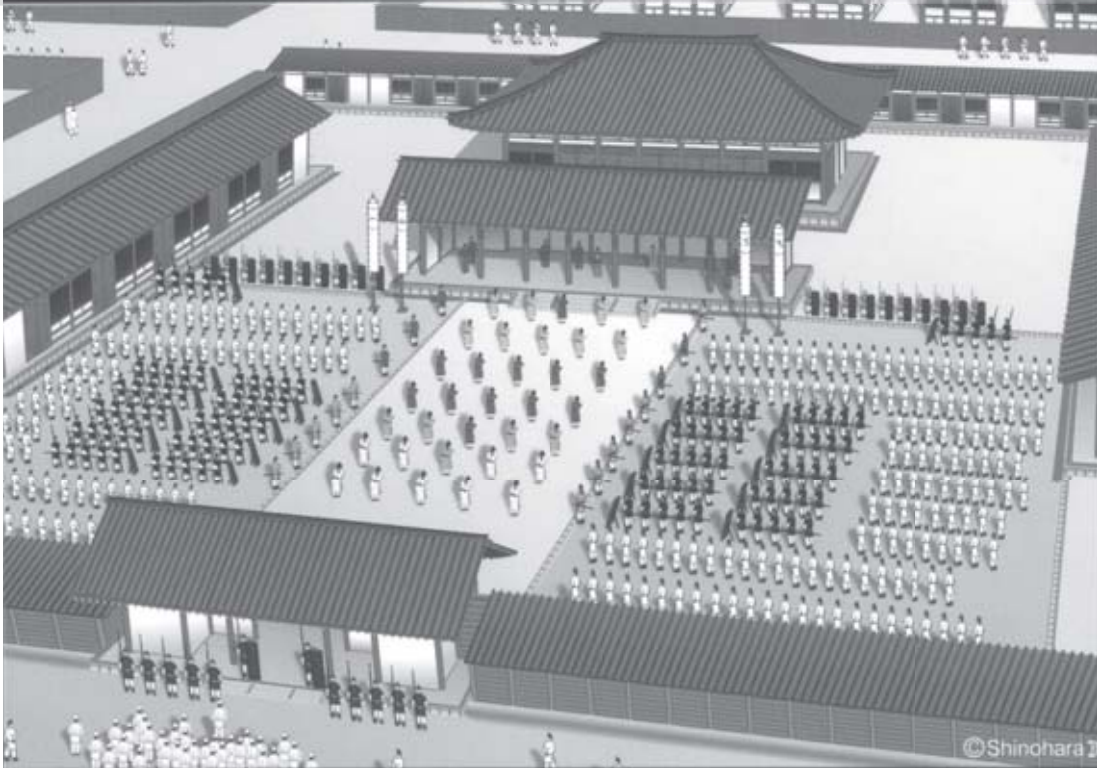


古代の役人の正月元日は慌ただしい？



下野国府の元日朝賀の儀式風景(イメージ)

しもつけ風土記の丘資料館第16回企画展図録より転載。(篠原祐一氏作図)

新しき年の初めの初春の今日降る雪のいや
重け(万葉集卷二十・四五一六)。「年の始め
の今日降る雪のように吉事の重なることを
願った内容」

この歌は、天平宝字三年(七五九)の正月
一日、因幡(鳥取県)国守(長官・今の県知
事)であった大伴家持が、国庁(役所)にお
いて宴を催し、国司・郡司等を饗した際に詠
んだ歌とされています。家持は前年六月に転
任してきたため、当地ではじめて迎える正月
であったわけです。国庁における宴とは何
か?今風に言えば「新年会」ですが、実はこ
の宴会は現代より少し意味深い儀式でした。

宴の前の儀式ですが、『続日本紀』には、
律令国家が成立した年(大宝元年(七〇一))
正月の藤原宮での儀式の様子が克明に描かれ
ています。文武天皇は大極殿の高御座に着座
し、百官(大臣・官僚)の祝賀を受けた際、
正門には鳥の幢、左に日像・青龍・朱雀の幢、
右に月像・玄武・白虎の幢を立てて儀式の場
を飾りました。「文物の儀、ここに備われり」
(学問・芸術・法律・制度など、いわゆる大
宝律令がここに完成したことを誇っています
とあるように、新しい国としての出発を
祝っています。右大弁従四位下下毛野朝臣古
麻呂も勢ぞろいした百官の先頭の方に整列し
ていたことでしょうか。



下野市教育委員会 文化課

地方政庁の国衙においても元日における朝
賀のしきたりは、宮中にならい同様の儀式が
おこなわれました。各種の規定を記す「儀
制令」によると、国司(上級役人)は国府で
働く役人や郡司を率いて「庁」(都の政庁か)
に向かつて朝拝し、その後、国守が祝いの言
葉を受けることになっていました。地方に赴
任していた貴族・官人にとって、元日は一年
の中でも特別な意味をもっていたのです。正
倉院に残されている薩摩国(鹿児島県)の資
料では、薩摩国府で元日朝賀に参列したのは
国司以下の役人六十八人、但馬国(京都府の
一部)では二十六人とあり、役所の仕事始め
式に列席する部課長級の人員数と似ています。
儀式の後には宴が催されました。天平五年
(七三三)の越前国(石川・福井県)の例では、
三十二人が宴会に参加しています。この中に
は国司・郡司のほか軍事組織(軍団の要職者
が参加しています。冒頭の家持のように宴会
で文才のある役人は歌を詠んだようです。

元日朝賀の儀は、軍事や軍団長など地方出
身の軍・政関係者が国守の指揮下で一堂に会
する一大行事であったことがわかります。

現代でも宮中の儀式として「歌会始」があ
ります。当市でも新春の宴として「賀詞交換
会」が開かれますが、歌を詠む人はいるので
しょうか?